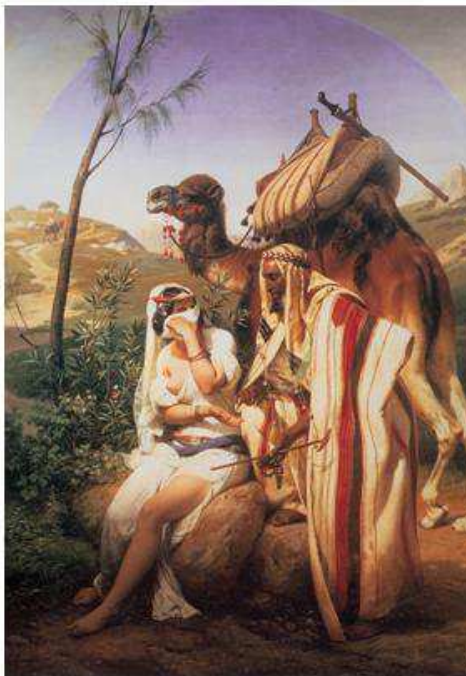


ヤコブの息子たちは父の愛を独占し、兄たちが自分にひれ伏す夢を見たと言った弟のヨセフが野にやってきた時、殺そうとして捕え、穴に入れて置きました。殺すのは忍びなく、それよりは売り飛ばそうと提案したのはヤコブの四男ユダでした。ところが、ヨセフを見失ってしまいます。父ヤコブは悲しみ、慰められることも拒みませんでした。その後、ユダは兄弟たちと別れ、カナン地方の女性を見初め、結婚します。そして、長男エルにタマルをいう嫁を迎えました。ところが長男エルが若死にし、タマルは寡婦となってしまいます。当時、家系は長子が継ぎ、子がなくて長子が死ぬと弟が兄嫁の元に入ります。

そこでユダは兄嫁タマルに次男オナンを与えました。ところがオナンは子どもができて自分の子とはならず、兄の子となるため、「子種を地面に流して」、タマルの妊娠を避けます。このことは神のみ心に反する行為だったとして、オナンも若死にしたと記されています。三男シェラもいましたが、ユダは恐怖を感じて、彼女を実家に戻します。シェラが成人してからも、ユダはタマルを寡婦の服を着せたまま実家に置いておきました。



Judah and Tamar Horace Vernet

やがてユダ自身も寡夫となり、しばらく喪に服した後、仕事で町に出かけました。それを人づてに知ったタマルは計画を立てました。身なりを変え、ベールをかぶって待っていたのです。道端で、ユダはタマルとは知らず、声をかけ、誘いました。そして子山羊をあげるからということでユダは交渉します。その際にタマルは、子山羊が手に入るまでの保証を求めます。ユダは持っていた印章と杖を渡しました。交渉が成立し、ユダとタマルは関係を持つのです。

子山羊を送って、保証の印章と杖を取り戻そうとしたユダは、タマルを見つけることができませんでした。神殿娼婦ではない、どこの誰とも知らない女と交わったことが物笑いの種になるとあって、ユダはそのまま不問に付しておきます。

やがてタマルが妊娠したことが判明します。ユダは「あの女を引きずり出して、焼き殺してしまえ」と激昂します。そこでタマルは腹の子の父の証拠となる印章と杖を示すのです。それを確かめるとユダは「彼女の方が正しい」と、潔く自らの非を認めました。タマルの産む子どもはユダの長子となりましたが、ユダはタマルと交わることはありませんでした。やがてユダは、弟ヨセフに兄弟のためには犠牲となってもよいと言う、優しい責任感ある人間として、再登場します。その心根は素晴らしいものですし、父ヤコブによっても兄弟の中でもっとも高く評価されています。そして、タマルによるユダの長子が、イエス・キリストへつながっていくのです。

ユダとタマルの物語は現代の私たちには理解できないような話です。けれども、タマルはユダのために子を産んだ立派な嫁であると、ルツ記 4:12 で褒め称えられています。聖書は古文書であり、その時代による制約があるとつくづく感じます。レビレート婚は長男の嫁保護という側面があったのでしょ。それゆえオナンの行為は責められるべきものだったのでしょ。神殿娼婦という言葉が出てくるのも、ここが最初です。タマルは娼婦をし、糾弾されましたが、生き延びます。男は娼婦を買う、側女を置くなど、誰にも責められず、性的には奔放に行動して、結局は家庭を壊していきます。女は子どもを産む義務があり、寡婦となっても婚家に縛られ、娼婦になって生活の糧を得るなど、厳しい状況に生きざるを得なかったことが聖書に記されています。